

昭和三十五年五月十五日 ご講演

「塾創立五周年記念講演」

今日は特にこういうお話をしたいといった大きな事はございません。思いつくままに極めて散漫ではありますが、二、三申し上げてみたいと思います。話が多分突飛になるかも知れませんが、その点はどうかお許しを願いたい。

始めに私が最近に出会いました事件で感じました事を一つ申し上げます。それはこの二三年前から私の友達の川喜田(二郎)君という方が、ネパールの奥へ探検に参りました。今映画でかかって居りますが、ネパールの奥を探検してそれを映画にとりました。これは民俗学的並びに社会学的な意味に於けるエクスペディション (expedition 探検隊) であります。極く優秀な学者が参ったんでありますが、これに読売新聞の映画をとる方の大森君という方もついて参ったんであります。ネパールという国は昔から鎖国をして居りまして、最近にその鎖国を解いた、世界の新しい国であります。ですから有名な一九二二年に英国のエクスペディションがエベレストをアタックしたんであり

ます。この時にはマロリーとアーヴィンと、この二人が殆んど頂上まで行つて、そして二人だけで三度目のアタックを一番上のキャンプからやりまして、そこが写真にとれて居りますが、それから或るリッジ(尾根)へたどりついて、向う側へ行つてそのまま消えてなくなつたんであります。これが一九二二年の悲劇であります。私は丁度その時分にロンドンに居りまして、その写真を見て知つて居るのであります。その時の大將はジェネラル・ブリッジであります。ブリッジさんとも私はお目にかかつた事があるであります。非常に皆をシヨックした事件でありました。さすがにエベレストはなかなか人を近づけないという感じを皆に持たせたものであります。その時はネパールは鎖国して居りましたから、英国の部隊はネパールからアプローチが出来ない。従つて西藏(チベット)の側から登つたんであります。

ところがネパールはもう開国を致しましたので、最近のエベレストのエクスペディションは殆んどネパールから登つて行くようになった

元大蔵大臣 日銀総裁 渋沢敬三先生

て居るようであります。ところがその川喜田君のどつて参りましたフィルムの中に一つ非常に面白いものがある。それはあの辺の鳥葬、バード・フューネラル、鳥のお葬いであります。ネパールには色々な種類のお葬いの形式がありまして、カソマキ、トソマキ、同時に鳥葬というのがあります。これは皆さんも歴史でお習いかも知れませんが、ボンベイのすぐ近所にタウル・サイレッツというのがあつて、そこでワルチャワ、いわゆる禿鷹に人の死骸を喰わしてしまふ。それを本當の田舎で地で行つて居る所であります。話には聞いて居つたけれども、本當にあるかどうかという事は皆疑つていた。

ところが川喜田君の一隊が約一ヶ月以上同じ様に住つて、その村の人々とも仲よくなり、いろいろその村の事を調べている中に、そこのお婆さんが一人死んだ。そこでどんな葬式をするかと思つたら鳥葬である。村の小高い山へそのお婆さんをついで持つて行つて、これは大体ラマ僧がやるんですが、それは皆自分の息子・親類でありますから、息子や親類がかつぎ

うだろうか、ライフは買わんだろうかと相談してみた。そうすると、しきりと見て居られましたが、これは面白い、世界で全く珍しい写真だから、これなら買うだろう。僕がすっかりアレンジするといつて、わざわざ電話をかけて、ライフの編集次長のルットンという人にアレンジをして、私をわざわざ連れてそのライフ社へ行ったんであります。私もはじめて入って見た。そしてルットンさんに会ってその事を話して、これはどうだろうか、使えるだろうかと云って聞いてみた。約四十枚ばかりのスライドで、他のものも写って居りました。大きなテーブルがあつて、そこに四角の磨硝子があつて、下へ電気がつく様になつている。そこへそのスライドを並べまして、電気をつけて、上からルーペで見て行くんです。これは面白いと言って見ているから、これはしめたもんだと思つて傍にいた。すつかり見終つた時にこちらを見て、「これは使えない」と言つて居ます。

私は非常に吃驚したんです。あれだけほめていて、何を言うかという感じが致しました。然し怪訝なく言うもんですから、ついルットンさんも笑いながら、「実はこの写真は甘いんだ。一体この写真は日本のレンズだろうね」というから、「無論そうだ」。「どうも日本のレンズはこんな筈はない。ライフのカメラマンは殆んど日本のレンズを使つている。非常にいいんだ。

にも拘わらずこういうのはおかしい。君、この写真機を買つて海外へ行く時、一遍新聞でも写して見て、これをうんと拡大してテストしたか」と来たんですね。これには一寸参つた。そこでなかなか私も承知しないものですから、それじゃつてんで、今週出たライフの別の絵のスライドを持つて来いって、下の人から取り寄せました。二つをくらべて見て、相当よく写つていると思つていたんですが、よく見るとまるで甘い。一言もない。小さな三五ミリのスライドを大きなものに拡大して印刷するにはたしかに甘かつたようであります。

それで私は非常に教えられた。つまりアキュラシイ (accuracy 正確さ) という問題です。日本人は絵をかいても、絵を見ても、昔から墨絵というものがあつて、或いは日本画もそうであります。むしろ正確を尊ぶよりは、大きく一筆で書いたものに何かそのものの本質を表わしている。それに満足する傾向を我々は持つている。芸術として推賞すべき本質的な問題をそこに含んで居ります。しかしこれにはどつちかと云うと、日本人はその方に慣れすぎて、むしろはつきりした事は芸術的でないという人が多いいんであります。私もその一人であります。ところが写真を印刷するという事になるといふと、それでは駄目なんだ。やっぱり非常なアキュラシイがなければ、精密度がなければもの

にならん、ということの痛棒をくらつたわけでありませう。

そこで私が学びましたのは、なるほど西洋の人というものは発達した基盤というものを持つて居る。これが自然科学ならば何処までもこの精度が問題であります。無論、物理でも化学でも皆さんがお習いでありますように、これには相当の誤差を許して居ります。精密機械なんていいませんが、あれは本当は精密じゃない。相当のよつぽどいい機械で一万分の一の誤差にとどまればいい方でありませう。普通精密と称しているのは本当は精密じゃない。時計等も精密とは言えます。精密とは言えるけれども、精密と云えるかどうか。一日に一秒の何分の一クリックの正確な時計とは云えないであります。我々の持つて居る時計は一日に二分や三分違つても、お互いが許しているから時計屋さんも安心して居る。本当のクロノメーターのような恰好の時計であるならば、一秒の何分の一の誤差をも許さないような精密さを要求されるわけであります。また、いま精密機械の精度の世界的水準はイレヴン・ナイン (99.99999999) 即ち十億分の一の誤差まで迫つて居るのであります。ここまで来なければミサイルみたいなものとか、人工衛星みたいなものが飛ぶ筈がない。つまり本当の精密というものを何処までも追及する迫力というも

のが西洋人は猛烈である、という事を私はその時初めてつまらない事件で身にしみて感じたのであります。そして帰って来て大森君なり川喜田君に実はあのスライドは採用されなかつた。皆は、奇態だ奇態だと云つて弱つちやつた。自分達は非常に自慢して居た。普通すわり込んで映写したりなんかしている時はなかなかいいんです。しかしこれを本当に印刷しようとすると、やはり足りない事は確かです、他とくらべて見ても私の頭が下つちやつたんですから。そこに行く日本カメラのレンズはよかつたかも知れないが、或いはその他のシャツタ一なり、或いは機械そのもののメカニズムの材質に欠点があつて、何回か使つていながら、もうなつたのかも知れません。その原因はよく分りませんけれども、兎に角そういう厄介な所を旅行すれば写真機を三つ位持つて行つてしょつちゆうだんだんと新しくして行かなければならぬでしょう。どうしても儉約して一つでやる中に機械が悪くなるという事もあつたらうと思ひます。

そんなわけで精密というものは如何に大切かという事をしみじみ感じた。皆さんも恐らくこの中には理工科の方も多岐に及ぶでしょう。また社会科学的な方面の方でも、私はこの精密という事に対して理解と本質を十分にわきまえて居られる事が非常に必要だろつという事を感ずるのであります。戦争中にも陸軍でも海軍でも、科学を自分の軍備のために非常に尊びまして、そして色々云つたんであります。例えばジルボニウムであるとか、或いはゲルマニウムであるとか、随分日本では造つて居りましたけれども、それに要求された精密度というものは九九・九九割は精密だと思つて居た。むしろ純鉄とか純銅とかいつたら、むしろ九九九くらいになつたらもう純だと云つて居た。ところが今はそうではありません。此頃盛んにトランジスターが使うゲルマニウムにしましても、これなんかも純度がよくなければどうにもならない。七・九(99.9999999)とか或いはもつとよくなれば八・九(99.9999999)とかいふような純粋度を要求している。そういうつまり精密なものになつて来た。そこに始めて科学の基盤があるという風に思ふんであります。この基盤は並大抵のものではないのであります。いい加減に許してしまつては相成らんものであります。しかしまた一方大雑把に許すべき問題も沢山あるのであります。しかし一方科学を本当に積み上げて行くには大切な要素であるという事を深く感じたのであります。

先程申し上げたように兎角こつ排句的な十七字で森羅万象を言い表わそうと云つたような気分が我々お互いに理解されて居りますから、精密度の方から云つと、もし精密にもの言おうとしたら、俳句になんか決してならない。支那の漢文の白髪三千丈式の精密度のむしろない方を尊ぶところもあるんでありますから、これに教養を受けた我々としては、多少その点で遜色なのは致し方ないかも知れません。これから国際全体の上に伍して行くにしては、その方の感覚も練磨しなければならぬが、同時に精密という事に対しても迫力を充分に發揮しないといかんと思ふんであります。

そこでそういうような事を考えましたけれども、そのもう一つ根本にやはり問題があるんじゃないか。皆さんは学校の歴史の上でルネサンスということをお習ひになつたらうと思ふんであります。日本ではルネサンスを「文芸復興」と昔から訳して居ります。私はこの訳には多少、素人ではありますが、異論がある。如何にも文芸復興というと、何かこつ絵画・彫刻・その他文芸、その方のルネサンス、その方が盛んになつた事だけを考へ勝ちであります。無論これも盛んになつた。中世期にローマ法王庁がまるで威張つて居つて、そして方々の民族の一般の住民はまるでそれに従わなければならず、何等そこに自分というものはなかつた。それがだんだんと人間の進化に伴つて個人というものを自ら発見した。個人というものが自分の中にあるという事を発見した。これが実は文芸復興の、ルネサンスの根本であります。それがあ

ために所謂キリスト教的な、古い中世のキリスト教的な戒律なり、或いはやり方なり、しきたりなり、ものの考え方なりに対してはどうしても承服できなくなつて来たのがルネサンスであります。ルネサンスまでは或いはペルジーノとか、或いはフラ・アンジェリコとか、色んな人が一筆タッチしてはお祈りしながら書いたというような宗教画が沢山あるんであります。よく出来て居ります。立派なものであります。ところがそういう敬虔な事だけでは承知しなくなつて来た。もつと人間の心の中に温かい血の気の通つたものを要求し出した。これがメレジコフスキーの書いた、先覚者の三部作になるんであります。そしてそこにはじめてギリシヤの昔の闊達たる美を再発見して、そしてそれに突進して行く。従つてラファエロの如きものになりますと、もうマリヤを描いても昔のマリヤではありません。或る時は自分の情婦になる。それがモデルである、という風な恰好になつてしまつて、昔のキリスト教とは全然違つた意味の宗教画がそこに出現して参りました。またレオナルド・ダ・ヴィンチみたいな非常なユニバーサル・ジーニアスも出て参りました。ミケランジェロみたいな途轍もない人も出て参つたんであります。燦然と文化が盛んになりましたけれども、その奥底には個人の自覚というものが立派に働いて居つた。ですから文芸復興とい

うものの、形は文芸が非常に世間をして瞠惑させて居ります。それ以外に科学の方でもガリレオが天動説を地動説に変えて居る、といったような科学の進歩もあつたんであります。しかしその根本にはどうしても個人というものを自分で発見したというのが何と云つてもルネサンスの大きな特徴であると思うのであります。自我を自覚したということでありまして。ここに非常に古くヨーロッパの文明というものが、近代文明へ入つて行く基礎が出来て居つたと思ふんであります。

それが十八世紀の終り頃になつて、今度は社会が社会を発見をした。自我を発見したけれども、その時にまだ社会というものを本当に発見していなかつた。お互いに社会というものの連帯性を発見していなかつた。ところが社会というものを社会自身が発見した。例えば今度六月一日から特急「つばめ」が十分か早くなつて「第二つばめ」が出来て来ると、それは確かに国鉄の或いは恣意的遊びかも知れない。見方によればそんなに何も早くしなかつたつてちつとも差支えないかも知れない。しかしあそこへ駆り立てるべき欲望は一体何処から出て居るんでしよう。単に国鉄の方の技師なり、従業員なりが何でも一分でも早くやりたいというだけがある望みでありましょうか。そうではない。やはり日本人自体、社会全体が或るスピードアップ

を要求して、それに国鉄が乗つて居るんであります。これは単に個人の欲望ではない。社会が全部で望んで居るところであります。そういうような意味に於ても社会の動きというものが、何れがあるという事をはつきり認識したのが、何と云つても社会が社会を発見した、これが社会的な本当の基盤であります。

ところが最近になりますと社会に別のものが加わつて来た。これが公衆であります。社会とはまた一寸違つた觀念だと思ふのであります。公衆衛生とかいうような言い方をしますが、この公衆というものが、これがまた別の意味で一つの大きな概念として成り立つて来ているように私には思える。これが実は或る意味では広告の対象となつて居る。広告というものは日本では昔から幾らでもあります。殊に実物展示の広告ははじめからある。古い絵巻物を見れば皆出ているんです。これは大変古めかしいようだけれども、実物展示の広告というものはデパートへいらつしやれば全部そうです。あれは皆実物展示の広告であります。ただ事柄が大きくなつて、厄介になつて、立派になつたというだけの話で、三越とか白木屋とか、高島屋とかいうのは、あれは単なる大きな建物の媒介にすぎない。中で売つて居るものに対しての実は媒介であります。そのような意味に於て、広告というものがやはり大きく進化したような顔をし

ているけれども、実は非常に古いものであります。

時に近代の広告は何を相手にしているかという、公衆であります。それを公衆に対して広告をしたいという人が発射します。或る媒介を使つて発射する。それが如何なる効果を持つかという事を今度は調べる。そしてその広告を更に有効なものにして行く運動が最近は科学的に研究されて来ている。これがやっぱり一つの大きな変化であります。広告なしには我々も一日も何も出来ない。というのは我々は消費者であります。生産者であると同時に消費者であります。消費者があらゆる消費についての知識を全部持っている事は不可能だ。従つてどうしても広告を見なければ自分の欲しいものが何処にあるか実は解らないのであります。従つてラジオ・テレビその他の媒介を使う場合もありますし、或いは人から人へ耳を使う場合もありますし、兎に角「我ここに在り」ということを知らされなければ我々は知らないわけでありませう。そこでどうしても公衆とこの広告というものが非常に緊密なものに極めて最近に於て急激な速度でなつて来た。これを両方の相關関係を調べるのが所謂PR、パブリック・リレーションという事がそこで言われて来るようになるのであります。

しかし、これは個人とは全然違つて、先程申し

上げたのが個人の自覚で、それから社会の自覚、日本の明治維新の時に実は個人の自覚というものに対して目醒めた。一遍たしかに目醒めた。これは板垣退助という政治家が「板垣死すとも自由は死せず」と頑張つて、大いに自由主義を論じ、個人というものの個人主義を論じたわけでありませう。しかしその時分は、何と言つても、まだ個人主義というものが本当に日本には入らなかつた。日本には家族主義という醇風美俗がある。だからそんな事を言つちやいかんというような風潮が強かつた。そこへ持つて来て、

西南戦争が起つた。その中にロシアが南下する。或いはドイツが黄禍論を唱える。風雲急になる。日清戦争が始まる。やつと勝つたと思つたら遼東半島還付という酷い目に遭つた。それが続いて日露戦争になつた。この軍部が或る意味に於て威張つたのはよくないけれども、そういうように追い込まれた状態での日本としてはあまり個人主義を言つては居られないだらう。その方の圧迫があつて個人主義は消えちやつた。消えたんじゃないやなくてむしろ圧迫を加えられて、本当に花が咲かなかつたといった方が適當であります。

その一番の適當な証拠は何かという、皆さんのお習ひであろう旧民法であります。旧民法を御覧になりますと、物権・債権・親族・相続というようなのがあります。物権とか債権の方

はこれは明治初年にポアンナードが来て、フランス的な法律を入れ、また独法も入れて、英法も加味して日本で作つたものであります。ところがあの相続に酷い事が書いてあつた事を今になつて見ると気がつく。妻は無能力者です。

旧民法では、妻が手形を書いても全然、どうにも夫の同意がなければ経済的行為にならない。しかも戸主権というものがある。戸主が全部を握つて居る。それで家督相続というものがあつて、つまり家が単位だ。個人が単位じゃない。今でも可笑しいですね。結婚式なんかに行つてみましても、何々家と何々家の御披露と書いてある。あれは家が結婚するんじゃないんですね。本当は、誰と誰とが結婚するべきなんです。家の結婚ではない筈ですが、誰も彼も何々家と何々家とのお祝いと言つて居りますが、或る意味に於ては昔の名残であります。そのような意味で酷いものだったんですが、今度の新憲法になつて、その下で出来た民法ではもう次男・三男であるうが、妻であるうが、女の子であるうが、全部個人を認めて居ります。これは非常に大進歩であります。

しかし世の中の移り変りは簡単に行かないので、まだ何々家と何々家の結婚になつて居るのであります。そこでそういうような意味で、日本には本当の意味の個人の確立という事はなしに、少くとも確立した人は沢山いました。

我々の知っている中でも例えば福沢諭吉先生の如きは、独立自尊という事を言われて本当に自立自営をされた方であります。こういう方は数多く居られた。しかし、日本人全体から見ると本當の意味の個人を自覺して居られた方は実は少い。親父がやかましかければ、それに反抗する。反抗した人は沢山いる。皆さんも時々反抗して居られるかも知れない。しかしそれは本當の個人の確立を本にしての反抗かどうか。ただ自分のおもむく所と反対されるからしゃやくにさわるから怒っているのか、この二つははっきり区別する必要がありますが、そういう意味に於て、本當に個人の確立という事があつたかと胸に手を置いてみると、どうも日本ではそれはしなかつた。軍国主義が禍して、むしろ出来るだけ個人主義というものを避けた傾向にある。しかし西欧の社会主義は個人主義の上に立つた社会主義であります。個人主義は先ずルネサンスが出来上つて、そして相當の訓練を経た上で社会を發見して社会主義が出来た。社会主義そのものに実は個人というものの裏付けがはつきりしている。これは社会主義的な行動と西欧の社会主義者の行動を御覧になると実ははつきりしている。ところが日本の社会主義は個人がはつきりしていない所に社会だけがやつて来ちゃつた。だから自分がどうなつてもいいような恰好になつている社会主義が多い。こ

れは余程考へるべき事だと思つてあります。滅私奉公という言葉がありました。これは個人主義に全く反対の言葉で、自分を亡ぼして奉公する。大變勇壯であり、また犠牲的な感じは沢山盛り上つている言葉であります。けれども個人が滅私をする事がいいかどうか。私は「無私」でなければならぬ。無私と滅私とは非常に違ふ。滅私という事はどうも強制的な臭いがする。或るものに外部からの圧制によつて、圧迫によつて、滅私になつて行く一つの勢いのこもつた言葉のように感じます。本當に無私の人であつたなら、私は喜んで国に殉ずるのが結構だと思ひます。無私であるべきだつた。アンセルフィッシュネス、これが本當であると思ふ。それならば個人というものが自覺して、充實して本當に個人が確立されて、その個人を自分を無にする。そういう態度に出てもよいなら、実に立派なものであります。何だか解らないけれども、自分を無くしてしまうんじや、これは少し酷いと私はこう思ふのであります。そういうような意味で日本には何となく個人というものがある確立しないで、実は今まで来ているんじやないかという感じが強くするのであります。

労働運動を見ても、或いは学生運動を見ても、非常に威勢がよい。勢いがよいけれども、個人々々が、俺はこうだ、俺はこう思うと言へる人が居るかと言つて実はいない。誰かが言うか

ら仕方がないつていうんで、くつついて行く。くつついて行く方が勢いがよさそうだと言つて、さらにくつついて行く。附和雷同であります。その要素がどのくらいあるかという事は、一遍胸に手を当てて皆さんが反省してみる必要があるんじゃないか。論語に「君子は和して同ぜず、小人は同じて和せず」という言葉があります。君子というものは教養が高い。教養の高い人は自分はどう思うと言つ事を知つてゐるから、或る人はこうしようと言つたつて、なかなか言う事を聞かん。しかし喧嘩はしない。和して同ぜずです。ところが小人、教養のない人は同じて和せず、すぐ賛成しちゃう。賛成しているかと思つと、何時の間にか喧嘩しちゃう。これはなかなかいい言葉であります。戦争中にはこの現象が随分あつたもんです。我々もそういう目に遭つて居ります。或る会合があつて、政府からこういう御通達がある。皆やれつてんで、町会とか、或いは色んな会社なり、学校なりで會議をする。色んな会があります。そこへ政府が原案を出す。或いは自治体が原案を出す。それを皆で話し合つて、最後に皆が賛成、満場一致。満場一致という事は實際の世の中では有り得ない筈なんだ。ところが満場一致。それで廊下へ出ると、あんな事が出来るか、なんて言つてた記憶が私自身にある。これじゃ「同じて和せず」です。

皆さんが、塾生委員会を開いて議事をやるとおっしゃる。結構です。議事をやるならば、どうしても和して同ぜずでなければならぬ。俺はこう思うから、俺はこう思う、とやったんじやあ喧嘩になっちゃう、これは日本人の悪い癖で、日本人のまずいところはデイベーションとデイスカッションをこっちゃにしている。討論と研究をこっちゃにしている。デイスカッションというのは、此処にある問題を色んな面からこれを突っついて行く。俺はこう思う。僕はこう思う。そしてこの問題に光を当てて、そして皆で研究した最後に、これをどういうところを持っているか、と話し合うのがデイスカッションであります。

討論は違う。討論は始めから俺はこう言いたいと言つて、べらべらしゃべる。反対の人は立ち上つて、それは駄目だと打ち砕いて、それをまた反撥する。それで激論になる。これが討論であります。何方が勝つたか負けたかという事になるんであります。このように討論会というものもあります。少くとも自治委員会辺りでは討論会ではすまされぬ。本当は研究会であります。自分が考えている事が常に正しくて、自分以外の人の考えている事が皆間違いだと思ひ上つたら、これは大変な間違いであるという事に気がついて欲しい。自分の世間、自分の持っている、一生の中に若くてもそれ迄に経て

来た色々な環境から生じて来たところの世界観、或いは人生観というものもあります。それだけが自分の世の中の全部であると誤解しちゃいけない、まだ他にも見方がある。その見方或いは考え方というものも充分味わつてみて、自分の人生を太らせなければならぬ。そういう意味に考えれば、どうしても人の心の違いというものは、決して単に表面の言葉で変つていく事じゃなくて、大きく見れば同じものを指しているながら、ただ富士山の登り口が須走口にあるのか、吉田口にあるかという事になる。それを充分にわきまえて、お互いに、ただその時に少し上の人とか長上とか或いは権力のある人に仕方がないと、ただそれに雷同して行くという場合は、個人として取るべき態度ではなからうと思ひます。自分はこう思うと言つて、それが一番よくて、全部が他のが嘘だと言つて争う事もまたよくないと思ひます。この点が非常にむずかしいところでございます。この点を充分にお考えになつて戴きたい。

終戦後、日本では「自由」という言葉が盛んに行なわれました。自由という言葉は非常に古い言葉で、日本でも古くから使われている。私が古文書の中で見たのが、七百年くらい前の言葉にも自由という言葉が出て居ります。或る市で物の値段を決める時に、自由にやっちゃいかんというお布令が出ている。この自由は放埒と

いうか、或いは勝手にやっちゃいかんという意味だ。むしろ自由という字をネガティブに、不自由とかいう風に使う場合にはたしかにそういう意味になる。「どうも御不自由をかけたました」というような時にはその人の思い通りにならん事なのです。

ところが自由という言葉の本質は、そうじゃない。これは英語では二つの言葉がある。一つは「フリーダム」、一つは「リバティ」。日本では、この英語の言葉を両方とも「自由」と訳しちゃつた。ここに一寸、終戦後間違いが起つた。私は変だと思つてきました。丁度東京裁判に来ていた弁護士にジョージ・山岡という人がいました。維新の大変な元勳であります山岡鉄舟さんの、血はつづいてはいないが、お孫さんであります。お父さんに附いて、アメリカへ行つてしまつた人です。アメリカで二世で、弁護士をやつて東京へ来られた。なかなか出来る方です。この方に私はリバティとフリーダムの二つの言葉があるが、共に「自由」と訳しているが、どう違うのでしょうかと伺つてみた。そうすると山岡さん考えて居りました。「こう説明したらよくありませんか。リバティというのはたしかに自由と訳して宜しい。しかしこの自由は、個人の尊厳、基本的人権をしっかりと護ること、と同時にこれはその個人のもの、自分自身に対する責務、或いは自分の周り

にいる家族、友達に対する責務、また属している自治体であるとか或いは国家に対する責務、地球人全体に対する責務、これをはっきり自覚して、これに対してはどんなにつらくても立派に自分の為すべきことはやって行こうと、その代り人から圧迫はされない。これが本当の自由というものだろうと。これをリバイティと言うんだ。フリーダムは少し違うんだ。フリーダムは英語でも、フリー・フロム、等と使うんだ。すでに不当又は不正に抑圧されたり、圧迫されたものを、不正なものを取り除いて、元の形にするという事がフリーダムである。だからこれは『解放』と訳すべきだ』と言われたんであります。私も非常に解つたような気がした。

そこで終戦直後に、この自由は本当の個人の尊厳、つまり基本的人権は自分に都合のよいような基本的人権であつて、他人の基本的人権はちつとも重んじない。そして自由と称しているのも放埒になつた。これは「解放」であります。確かにそうであります。兎に角、戦時中日本全体としてはあのくらい中央集権を強固にして、そして思想から行動からあらゆるものを統制したのでありますから、この統制から逃れんとする意欲は、自然的に強烈なものであつた事は間違いない。しかもそれに加えて物資が不足したんですから、これを何とか獲得して元の通りにしたいというこの社会的又は公衆としての

欲望は強力であつた。これがセンサーションを起した原因であります。それがずっと出来て来ると満足しちやつた。或る程度は満足した。しかしなかなか満足できないところが沢山ある。しかし、一応あの時から見て満足される状態になつた。これはたしかに抑圧されたものに対して元の正当の形へ戻すという意味に於ての自由であります。リバイティは一寸違うもので、もう一つ奥にある個人の尊厳というものをはつきり自覚して、その代りそれには不正又は不当なものに反対しても敢然とはねつける。しかし自分のまわりを養つてくれている、例えば塾なり、或いは委員会なり、或いは市町村なり、或いは国なり、世界全体に対する自分の責務としては、たとえそれが嫌な事でも立派にやつて見せるというのが個人の尊厳であります、という意味のことを言われたんであります。私はその点は大変結構な事だと感じたのであります。

そこで最後に申上げてみたいのは、個人というものをそこまで持つて参りますと、最近の世の中の動きが一体どうなるか、私は恐らく此の数十年の間に、日本人一人一人が、「お前は日本の国をどう持つて行くか」という事を日本人一人一人が聞かれる時が来ると思う。その時に「私はこうします」と言えるだけの心構えを持つて行きたいという事でありませぬ。私は反共的な人間であります。共産圏は嫌いであります。

私は自由を尊ぶのであります。不自由な共産の勢力に対しては私は不賛成であります。しかし私は単なる反共を言うんじゃない。反共を言っただけじゃ問題になりませぬ。もう一つ奥の問題、「何が今の自分として本当に正しいか。誰が善いとか悪いとか」という事じゃない。自分として何が正しいか」という事を本気になつて考へるといふ事が、今一番必要になつて来た。この点について、皆さん方は未だお若いから、毎日の新聞なり或いは雑誌なり色々なものに見がうつつて、それから受ける感覚で色々な事を考へられる。それが新しいという。新しい事と善い事は違ふ。また古い事と悪い事とも違ふ。何が善い事か、何が悪い事を分けなければならぬ。新しい古いで、善い悪いを分ける事は宜しくない。そうじゃなしに、何が悪いか、何が本当かという事が私は一番大切だと思ふ。

それを見分ける基本は何処かという、私は「個人」だと思ふ。個人が、「俺はこう思う。誰が何と云つたつて、こう思う」というそこにはつきりした線を描きます。皆そう言つていながらよからうという考え方はいけない。それだから喧嘩してもよいという意味じゃありません。「自分はこうします」という事は何かの事件に合つた時にはつきり言える人になつて戴きたい。それなしに、様子を見て、どっちがいいかなあ、なんて頼りない人生観を持つようでは

は、私は、和敬塾の方々としておかしくなると
思う。必ず二、三年のうちに「お前はどっちを
選ぶか」という事が大きく各人一人一人にひし
ひしと解る時が来ると思う。これにどう対処す
るかという事を、今から御考えになる事を、ど
うかお願い致します。私のお話を終らせて戴
きたいと思います。(拍手)

※当DVD収録の講演録には、現在では不適切と思われる表現が
用いられている場合がございますが、講演時の時代背景等を尊重し、
当時のままといたしました。